

## 山西の護り

### 交代部隊は沖繩へ

佐賀県 土師 善次

私の徴兵検査は昭和十四（一九三九）年六月初旬でした。ちょうど、私の体の具合が悪かったのですが、一応全部の検査が終わり、徴兵官の前に立って判定を聞くべく直立不動の姿勢を取っていました。「甲」とも「乙」とも言わないのです。

控室で「どうだった？」と在郷軍人会長から聞かれましたが「何も言われなかった」と答えましたら「そんなことないから、聞いてこい」と言われ、再び徴兵官の前に立ったら「兵隊に行くも国のため、銃後で勤めるも国の為じゃ、心配することなか」と言われました。

そして間もなく臨時召集令状（赤紙）が来て三カ月間福岡の歩兵四十六部隊に入りました。

私は三男三女の長男として生まれ、両親は飲食業を有田で営んでいました。田中姓ですが、母が一人娘だったので祖父が私を養子にしたので土師姓になりました。祖父は農業でしたので私も農業をやっています。

大東亜戦争が始まるとすぐ召集令状が来て、二月十九日、久留米の特科隊に入隊しました。四、五日すると、「野戦欠員補充要員になったから、今から外泊しろ」と言われて家に帰って別れを告げて帰隊しましたら、曹長から「お前は外地に行かんでもよか」と言われ、今度は留守隊勤務に変更になりました。

でもまたすぐ久留米の歩兵第四十八部隊に転属を命ぜられました。そして隊長の当番や中隊事務の手伝いをやっていました。

昭和十九年一月頃になると、北支派遣軍の固（かため）部隊の編成が始まったので准尉さんに頼んで一緒に連れていってもらうことになりました

た。固第六七九五部隊（独歩第二二八大隊）の一員となりました。

中共八路軍が相手だと准尉さんから言われました。徒手帯剣の服装で出発、門司で乗船、釜山に上陸、一泊して貨物列車に乗車、床に藁を敷き詰め、朝鮮半島を北上中に右手の親指を覗き窓のヨロイ戸に挟まれ受傷しましたが、衛生兵から「処置ナシ」と見放され痛い指を抱えての旅路でした。

約一週間の行程で、目的地山西省太原の東方にある陽泉に駐屯する、北支派遣軍第一軍独立歩兵第十旅団独立歩兵第二二八大隊第一中隊に到着しました。

兵舎は平屋建ての中国民家を兵舎に改造した建物でした。

我々の到着を待ち望んでいた兵隊は秋田出身の現役兵部隊で、我々と交代して河南作戦に出動して、そのまま沖繩作戦に投入され玉砕した独立混成第四旅団の精鋭でした。分哨で交代する時に交

わした杯の味は今でも思い出すだけで胸が迫る思いがします。

大東亜戦争が始まった昭和十六年十二月頃の日本の北支那方面軍は、内蒙古方面に駐蒙軍（甲編成の一個師団、戦車一個師団、独混旅団一個）を配備していました。

山西省には太原市に司令部を置く第一軍があり、甲師団三個師団、独混旅団二個旅団が配備されていました。南方へ兵力補強のため精鋭師団は移動し、その後釜には召集兵主力の部隊が充当されましたので、敵である中国軍と中共八路軍及び地方軍閥軍は、好機到来と各地で日本軍を襲撃するようになり、到着早々の我々も日夜、警備と討伐に明け暮れるようになりました。

第一軍も乙師団一個師団、独混旅団一個旅団、独立歩兵旅団二個旅団（私達の旅団を含む）、独立警備隊一個となり兵力も減少し、兵器、装備も劣る弱小第一軍となりました。

特に山西省は中共精鋭軍、徐向前部隊が西安方

面から山西省内へ進出、日本軍の警備のスキマをぬって北上し、農民を巧妙な工作によって赤化地域を拡大していました。

第一軍は辛うじて、省内鉄道線の点を確保するのが精いっぱい、その点を警備する警備隊は、日夜、共産軍の襲撃を受け、それだけに犠牲を強いられていました。

独歩第二二八大隊本部は陽泉に、第一中隊は和順に、第二中隊は昔陽に、第三中隊は大隊本部のある陽泉にそれぞれ駐屯して警備に当たりました。

私の第一中隊長は伊万里出身の久富中尉でしたので心強く思いましたが、間もなく転属され、がっかりしました。そして戦後の戦友会に顔を出されたのには、びつくりしました。

八路軍はゲリラ戦が得意で日本軍の通信線を夜間切断するので、我々も夜間警戒によく出勤しましたが、なかなか捕捉するのは難しいことでした。昔陽の近くで輸送隊が襲われて救助隊が駆け

つけた時は既に敵影はなく、ただ一人、上等兵が右の大腿部に貫通銃創を受け生存していましたが、路傍の溝の中には打つ伏せになった初年兵の死体が一列に並んでいました。

八路軍の初年兵は脚に砂袋を縛りつけて山を登らせて脚を鍛える訓練をしているそうで、山や坂を登る時は平地を走る時と変わらぬスピードでなかなか追い付けませんでした。

私は歩兵で軽機関銃の射手で、九六式のチェコ製に似た提げ棒がついたもので、古い十一年式軽機の有名な「突ッ込ミ」が無く助かりました。

終戦の情報は、ちょうど私が沸騰不十分の湯を飲んだためにアミイバ赤痢にかかり、太原の陸軍病院に入院していた時に戦友から知らされました。

日本軍が、山西省の閻錫山軍の甘言と勧誘により中国に残留させられた事件のことは、私ら召集兵は一刻も早く祖国の家族のもとに帰りたい一心でしたので、その勧誘に乗った兵士はいません

でした。しかし他の部隊では若い独身の兵士は、上官の命令とあつて残留した者が相当いたらしいのですが、詳しいことは分からないです。

昭和二十一年秋、部隊は塘沽から米軍の上陸用舟艇に乗せられ佐世保に帰国しました。約五年ぶりに祖国の土を踏み無事な姿を家族に見せることができ、本当に良かったと思いました。

祖父は亡くなっていました、他の家族は皆元気でした。私と一緒に入隊した人たちも無事に帰っていました。

入隊当時の中隊長だった久富大尉は伊万里で酒屋をやっており健在です。戦友会は十年前に中止になりました。

私は現在農業をやっていますが、息子が食品店を経営しております。今私の念願は外国と仲良くして戦争を起こさないことです。戦争はいけません。勝つても負けても戦争はいけません。そう思っています。

私達が太原に到着と入れ替えになった秋田の兵

隊は沖縄に向かったのですが、輸送の都合で病兵や満期の近い兵隊を内地に残して征ったそうです。

独混第四旅団は編成替えて、それまでは五個大隊だったのを四個大隊に減らして、沖縄の第二十三軍の第六十二師団の歩兵第六十三旅団と名前が変わりました。

「あとをよろしく頼みます」と分哨の交代時に、にっこり笑った若い兵長の顔は今でも目に浮かびます。

沖縄戦史に歩兵第六十三旅団の奮闘が特筆されているのを読むと、あの兵長も二度と祖国には還らぬ運命だったのだと思います。